



昭和49年(1974年)
10月号(No. 352)
社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

定価一部 100円

目次

- 本文
神谷恭さんを偲ぶ……野口末延…(1)
噴火の鳥海山をたずねて……島中善弥…(7)
山下コレクションについて……吉野智雄…(8)
月山の薄雪草……坂倉登喜子…(8)
行事・委員会
玄さんの飯豊山50周年記念山行……沼倉寛二郎…(2)
UIAA 1974 年総会……神原 達…(3)
第12回金山平、木暮理太郎翁
碑前こん親会……山村正光…(4)
高頭仁兵衛祭……鈴木敏雄…(4)
第5回高所登山委員会
外国登山家へのアンケートの分析……浅見正夫…(4)
第6回高所登山委員会
谷川岳に集う……原真・三村和男…(6)
わたしのウェストン祭……川北 仁…(9)
海外からのたより
モスクワにて……田村俊介…(9)
図書紹介
わらじ(第4号)覆刻版……山崎安治…(10)
山のこころ……山崎安治…(10)
55 WAYS TO THE WILDER-
NESS In Southcentral Alaska
……松崎中正…(10)
深田久弥山の文学全集……高遠 宏…(10)
図書室だより……

神谷 恭さんを偲ぶ

野口末延

あのお元氣であった神谷さんが大病には勝てず八十四歳で残念ながらご逝去になられ、麻布の本立寺で告別式が催されご遺族ならびに同氏が、会長をしていただいた信託器Kならびに業界関係やJ・A・Cの代表の方々が参列、式を済ませられたが、同寺の本堂が狭かったのか、その状況は、庫裡の客間やこれに入りきれず外に待たされた期間の大勢の方々には、式の次第は知る由もなかったが、J・A・Cの「山」四十九年七月号で今西会長の弔詞が掲載されているが、その弔詞の中に「霧の旅会の創立メンバーの一人であった」と記されているが、同会は正八八年に創立、神谷さんは大正十五年に入会されたので、創立には全然関係されていないのである。であるのでこの弔詞の草案を書かれた理事の方が、土曜会には霧の旅会の発起人の一人である山崎金次郎様ほか一、二名が欠かさず出席されているので、これらの人々に聴いて下さったらかかる間違いは生じなかつ

たはずであるので、これは複製版の「霧の旅の木暮先生追悼号」の巻末に載つてゐるその当時の会員名簿をご覧願ふれば判然としますし、また四十九年五月号の「山」にJ・A・C会員の小野幸氏が「木暮友枝さんのこと」の文中に、甲州金山に建てられてゐる、木暮理太郎先生のレリーフのことにつき、石楠花山岳会(東京都庁に勤務および関係筋の方々で木暮先生のご指導を受けていた方々の会)と「神谷様の霧の旅会云々」と書かれてゐるが、霧の旅会には従前より主宰者はなく、現在十三名残つてゐる会員が和かにそのつど一人が世話役を買つてで、山行や懇親の旅行をして楽しんでゐるので、これをご承知下さつて、前記二点の誤りを訂正戴きたいのである。

なお木暮先生ご夫人の友枝様が昭和四十八年十月十一日吉祥寺の森本病院でご逝去になり、小金井のマンションにおすまいの令嬢、美枝子様の室でのお通夜の節は、J・A・Cと霧の旅会から生花が供えられ、J・A・Cの役員の方および霧の旅会からは、松本善二(J・A・C名誉会員)山崎金次郎(永年会員)外二、三名と小生がお焼香、翌々日の十三日は吉祥寺の井の頭公園脇の吉祥寺カトリック教会での告別式は、参列者は少く寂しいながらも厳かに内訌花して最後のお別れをしたのであり、これは霧の旅会から松本善二、山崎金次郎、吉田久兵衛(永年会員)、鶴岡元之助、松本熊次郎、原田幹市、小林幹三郎氏および小生(全員J・A・C会員)が式に参列したのである。

つぎに毎年金山で春(現地の増富温泉の要請で秋に二、三回開催したことがあった)催されてゐる木暮先生の碑前祭(木暮先生が五月初旬にご逝去になつたので)には山梨支部の方々のご尽力により、神谷様はじめJ・A・Cの大先輩の方々ならびに霧の旅会数名参加してゐるが、石楠花山岳会からは小野氏が第一回の時と碑を現在の地に移した時にお会いしたぐらゐで、同会の一柳兵衛氏が数年前逝去するまで毎春ご参加下さつたので感謝しているがその翌年の碑前祭の節、一柳夫人のご要望で同君が使用してゐた、ベレー帽と老眼鏡を、参加者一同のお許しを得て、碑の後方一問位のところに埋めた時とその翌年ご参加下さつたのみである。小生も時には不参列したこともあるので、この日に小野幸氏がご参加下さつたかも知れませんが、ご多忙でしようが、木暮先生とはご懇意だったようですからたまにはご参加願ひ、木暮先生との関係、山行の思い出話などお聞かせ願ふれば、主催の山梨支部の方々はもちろん、参加者一同喜びに堪えないのである。またこれがご都合悪ければJ・A・Cの小集会でご発表願ふれば、在京会員も喜ぶことと思います。からは是非願ひしたいと思ひます。

第三一四回小集会の「放談会」 集会委員会 お知らせ
日時 十一月二十日(水)
場所 日本山岳会々議室
会員の方ならどなたでも出席できます。普段、山岳会に思つてゐること、ご意見、ご質問、何でも結構です……また、山を語らうもよし……口の体操にルームにお出掛け下さい。

会員の親睦に努められた功績は後世まで伝えられると思ひます。
神谷様は小生より後に霧の旅会に入会されたのであるが、年令は九歳上だけ山歴も多くその頃の同氏は埼玉、群馬の国境辺をさかんに歩かれていたやうで、いろいろ話を聞くのを楽しみにしてゐたのであり、なにかと随分数えられたものである。
最初同氏の驍尾に付し歩いたのは、埼玉県西部の両神山で、何分四十年ぐらゐ前なのと、記録および写真は戦災で鳥有に帰してしまつたので、それ覚えてゐるが、昔は信仰の山であつただけに道ははつきりしてゐたが、時節外れの秋だけに山中人にも会わず頂上立てば、四方に見える山々を教へて下さつて、天気に恵まれた三日の山旅は終つたが、この時の楽しさは未だ忘れないのである。その後霧の旅の連中と木暮先生や武田先生と秩父や大菩薩辺の山々を歩いたが、これにももちろん神谷様も参加されたが、このとき参加した会員中にすでに物故された方が数人おり寂しくなつたのに、また先輩神谷様を失ふことになつたのは、とくに寂しく残念に思ふのであり、同氏のご冥福を祈つて駄文を終らせて戴きます。

〔ロンドン通信〕

UIAA一九七四年総会

神 原 達

承らくぐぶさに致しました。昨年の秋以来世界を震撼させた「石油危機」で、それは忙しい日々を送りました。国際石油産業の中心地ロンドンにて、石油情報の収集を仕事としております関係上、刻々と変る世界の石油情勢を追ひ、それを分析し報告するために、当地の電力危機の暗く長い冬の間など石油ランプをオフィスにもちこんでデレックスを打ったりしましたが、それも小康を得てやっと少し自由な時間がとれるようになった昨今です。

ロンドン駐在の間は仕事はほとんどにして、大いにアルプスの山々でも登りに行こうなどと虫のよいことを考えていたのに、それどころの話でなく、昨年はバリーに六回も会議に行きながらいまだルーブルひとつ見ている実情です。

それでもこの七月には二週間の休暇を得て、ユーゴスラビア、デルニツェで開かれたUIAAの総会に出席することができました。日本からこれられた牧野文子さん（海外連絡委員）のアシストをするため、ロンドンから自動車運転し、家族ともに行ってきた。ドバーをホーバークラフトで渡りフランスのライム市からシャンパーニュ地方をひた走り、田舎道を通りながらスイスのローザンヌに抜けてレマン湖の脇のモントルーに着。ここは、昨年のUIAA総会が開かれた所、旧知の場所ゆえなつかしく、ゆつくり屋敷、遠くにアルプスの山々を見ながらセント・バーナード・トンネルを抜けてイタリーに。モーターウェイを一路ミラノに行くもイタリー、ロンバルディア平

原の暑さにへいこうし、急拠北進、コモ湖畔で一泊。翌日ベニスに。そしてトオリエスタから国境を越えユーゴに入りました。

ユーゴは共産圏の中でも自由化が進み西欧の観光客なども多いのですが、UIAA総会が開かれたデルニツェはリエカから東北に四〇キロほど入った山の中の町で、その国民宿舎のような小さなホテルが宿舎兼会場でした。ロンドンから五日かかってのんびりと参りましたが、ちょうど総会が開かれる前日に到着し、すでに日本からの牧野夫妻、また英国代表の一人、アルバイン・クラブのソマリ氏（前々回から知りあい、ロンドンにて今回総会のスケジュールなど前もって知らせてもらった）、また事前に手紙連絡していたユーゴスラビア、スロベニア山岳連盟会長のボトクニツ博士（モントルーで逢う）など、旧知の人々が待っていてくれました。

UIAA総会の詳しい報告は正式代表である牧野さんから理事会になされることと思います。それゆえ私は感想程度にとどめます。その会に二度出席させていただき、少しずつ内情が判りかけてきたようです。

それは、国際的な組織、それも各国の組織の連合体をつくるということがいかにむづかしいか、ということ、またその国際組織がある程度古くなり独特の形でこう着状態におち入ると、それを改善するというのが骨の折れることであるか、ということです。

現在世界の三八カ国の山岳連盟ないしは山岳会がメンバーとなっているU

IAAの歴史は古く、今年で四二年目になるのですが、その発足当時の事情はともかく、世界の山岳団体連合体として唯一のこの会は意外と小さく、それほど強力な組織とは思われません。

毎年の総会に各国から出席する代表の顔ぶれも決っていて、何となく世界の山岳団体のクラブ的な色彩が濃厚です。もともと欧州中心にできたこの会の公用語は仏、独の二カ国語で、今年からやっと英語が公用語として認められ、その会報も三カ国語で編集されるようになったというところ、何だかこの会の性格を表わしているようです。

今回総会でも英国代表が議題の最後のその他諸々の項、にて発言し、UIAAの活動強化を大変真面目に説いてい

ましたが、共鳴した者は多かったはずなのに、その英語が通まわして丁寧すぎて判らなかつたのか一人も賛成発言をする者がいなかったのは少々淋しい次第でした。

山登りというスポーツが個人的色彩の濃いもので、どの国でも組織体をつくるのがむづかし、ましてやその国際連合体など至難のわざである、ということもUIAAではよく承知して

いて、そしてこの会を今まで運営してきた主としてスイスのひとびと（またそれをサポートした仏、独、伊、オーストリア人たち）が、現状維持に甘んじているためでしょうか。

UIAAへの参加は一カ国一団体とは限られてなく、何団体でもよいようです。それゆえ欧州諸国は自国の女性登山クラブなどもメンバーとして参加させ、欧州勢の投票権の増大をはかっています。また有効投票数は一代表一票ではなく、その代表の所属する団体の会員数に比例します。会員数によって投票の額も違ふので、UIAAにいくら寄与しているかという金銭的な重みが投票権数に反映する、まったく株式組織と同じです。

UIAAが今後どうなるかは毎年の総会の動きをみまさんと判りませんが総会には当会からも積極的にできるだけの多くの人を派遣する必要があります。この会が個人的な、人と人との関係を重視する現状であるのだから、何も英国や日本が一人がばって国際活動の拡大をせけんでも始まりません。しかし改革は少しずつ進めましょう。

今のところ日本の登山界にとってそれほど問題となるような議題はありませんが、将来何がおこるか判りません。連絡は密に保つべきと思います。その点昨年の総会に出席された海外連絡委員の鈴木郭之氏は登山用具委員会の委員長、メラリ氏ともよく連絡されていますが、それは大切なことで、も

つ将来、UIAAの定めた国際規格に合致しない登山用具は欧州アルプスでは使えない、などということがおこったと仮定し、もしその時日本がつんぼ機敷に置かれていたら大変です。

さてUIAA総会の件はこれ位にして、少々ロンドンの様子などを記します。ユーゴでは会議の合間にスネズニクという名の一、五〇六mの山に参加者全

員で登ったりしましたが、このエクスカーションは家族も皆一緒に、十歳になる私の娘はアメリカ山岳会のウィズナー氏のお嬢さんに連れられて先頭のグループで頂上に立ちました。

そのあと私も再び車で、ユーゴとオーストリーとの国境近くのジュリアン・アルプスをみてチロルに抜け、インスブルクからドイツに、ローテンブルク、ライン河をみて帰英したのです。

実は私、昨年九月にアルバイン・クラブに入会しました。この件はいろろと複雑な手続きなどあり、その詳細を何かに残しておくことは必要だと思

いながら、多忙のあまり通信をお送りすることができませんでした。伝統あるアルバイン・クラブに入会させていだ

だき大変名譽あることと感謝しています。また山登りの経歴や、その他登山関係の諸活動で、私などよりも格段に秀れた日本山岳会の諸先輩が大勢おられる中で、日本人会員として四人目、榎、松方、吉沢の大先輩について、た

またま英国勤務ができたという関係で入会の機会があったのですが、それゆえの責任を感じています、また先方も一人位若手の日本人会員がいた方が何かと都合よかったでしょう。

紹介者は十数年前にネパール時代に知りあつたチャールス・ワイリー氏（退役大佐、元副会長）とガーストン古書店主、二代目のレイス・ボーストン氏に連絡し、入会の希望を話しましたところ、クラブのセクレタリー、ペーカ氏を紹介され、そして申請書の書き方、メンバーシップ委員会に他の委員会からのリコメンドがあった方がよいことなどさまざまな点でこの三人がお世話になりました。私の場合、ヒマラヤン・クラブの会員でもあつたこと、少しばかり当会の海外連絡の仕事をお手伝いしていたことなどが役立ち、そし

て現在ライブライオンをしているロー
フォード氏(元ヒマラヤン・クラブ書
記)が推して下さり、申請書を規定の
様式で記し署名し、両リコメントの
サインをいたしたき昨年四月で委員
会に提出したのは昨年の四月で、す
すなわち事前にほとんど決ってから入
会申込みをするのです。そして七月に
全会員に配布された通信に私ほか数名
の名前が載り、一ヶ月間会員から何も
異議がなければ初めて入会を認められ
るのです。この間何回かの手紙の往復
で、ちょうど一年かかりました。

入会後ワイリー氏、ボーム氏にはそ
れぞれ機をみてお礼の席を設けまし
た。これは少々個人的なことなどで記
すべきかどうか判断しかねますが、エ
ベレスト初登頂のハント隊の隊員でも
あったワイリー氏と私の関係です。
ハント侯の「エベレスト登頂」をお読み
の方ならお気づきかもしれません、
ワイリー大佐はグルカ連隊の士官とし
て第二次大戦中は日本軍と戦い、そし
て長い間シガポールで日本軍のキャ
ンプにいたのです。その間の体験を、
ロンドンの日本料理店でも一流の「み
かど」という店で少し聞きました。日
本食は捕虜の時にさんざん食べたが、
こんなに美味しい料理は初めてだ、と
上手に箸を使い喜んでくれました。多
くの者がキャンプで死んだといひ、そ
してこれからの世代の者はどうか仲良
くやってくれ、君を紹介して全員にし
たが、あとは自分で開拓してほしい、
といわれました。

アルバイン・クラブの集いにはとき
どきでありますが、集まる会員の国籍
はさまざまです。その中に日本人がい
るといえないのでは会の空気も少し異
ってくるでしょう。なぜなら、例えば
つだったかドイツの登山家がヒンズー
タシニ遠征の話のスライドと共にした
ことがありますが、日本の登山隊とべ

イスと一緒に一ぱに登ったり競合
したりしたと話し、そのようにいまや
世界のどの山々にも日本人がでか
け、良い面悪い面でも日本人が国際的
な顔をだしているのです。もし彼ら白人
だけの集りでしたら、「ジャブ」という
言葉が聞かれたかもしれません。集会
の始まる前の雑談の時など、つとめて会
話に加わって、そしてここには日本人
の会員がいるのだぞ、ということを押
象すけています。

第 12 回

金山平、木暮理太郎翁 碑前こん親会

月日の経つのは早いもので、金山平
の木暮碑前こん親会も十二回を数える
ようになって。とくに本年は、木暮翁
がなくなつて三十年目を迎へ、昨年末
には丸善楼上における生誕百年記念展
といひ、近代登山の先駆者をたたえる
行事の一環として有意義のものがあつ
たと思う。

でも人生というものはハブニングな
もので、開催前日になつて、この催し
の中心的存在であつた、神谷恭名會
員の重体という飛電が入り、この催し
を楽しみにされておられた霧の旅会
の主要なメンバーがそっくりといつて
いほど欠席となつてしまつた。
五月十八日午後四時、翁の碑前にお

と意志表示は二九対二〇で、女性入
会を認めることになつたのです。現在
だが最初の女性会員になるかが話題
になつてゐますが、この六月に配られ
た通信文は、ウエストマコット夫人
(英)とB・L・ザイフェルト嬢(ス
イス)の両女性の名を会員申請者の中
に報じています。ウエストマコット夫
人は夫君同様登山家で、教師の職にあ
り、そしてハント侯とジョージ・ボン
ド氏のリコメンドとなつてゐます。

さて以上大変長くなりましたが、ま
た中には通信として活字にすべきでな
く、そのようなことは皆知つていて、
暗黙に了解し行動するという大人の社
会である英国のひとびとが聞いたら
何と思ふかと疑われる箇所もあるかも
しませんが、登山界の国際的な問題
にいささかといわれわれ日本人のため
にも、あえてそのまゝ送ります。こ
れからもときどきお便り差上げます。

山 村 正 光

いて記念祭が行われ、岩間升支部理事
長の司会の下に、大沢支部長が歓迎の
辞を述べた。続いて織内副会長が自然
保護の面からも先輩たちのこのされた
よりよい伝統をうけつて行きたい、
それが木暮先生の遺徳を偲ぶ具体的
な態度ではないかと挨拶された。

続いて、このこん親会には初参加の
松本善二名譽会員が、
「木暮さんとは群馬馬の山を幾度と
なく一緒に遊んでゐたが、ひげ
などあつてこわい方のように思はれて
いるが、実は女みたいに優しい方であ
つた。それに山が歴史家なもので、山
をあるきながらいろいろと面白いお
話をおきした。」



木暮翁碑前にて挨拶を述べる大沢伊三郎山梨支部長 1974.5.18 (撮影は山村正光)

木暮さんを直接知っておられる方々
も少なくなつたのでと前おきして、
木暮先生のかくれた人となりについて
つぎのように語られた。
「木暮さんと歩いて一番おもしろ
かったのは山の果をひいてるときだつ
た。栗をみつけるとキヤーとか大きな
声を出して実におもしろかつた。また
真面目な方で、自分の登ろうという山
をみたときに、ひれふしておじぎをす
るのが木暮さんのくせだつた。また甘
いのが好きで、とくにお多福豆が大
好きで、どんな山に行くときでも、お多
福豆のかんづめをもつていかれた。そ
の相伴に何時もあつたものだ。こ
んな文献にもないようなお話をま
るで昨日の出来事のように歯ざれよ
く話された。続いて野口末延永年会員
は、生前先生にたのまれていた本を探
すことができなかったこと、また昨秋
友枝末亡人がなくなつたこと、また切
思ひであることなどを話された。
折から、逆光の中に白樺の若葉がゆ
らぎ、ときおりウグイスが谷を渡ると
いった、実に心安らぐ清々しい一時を
すごすことができた。一休みして、午後
六時から恒例のこん親会に移つた。
例により、チーフコックの平井和雄君

高頭仁兵衛祭

鈴 木 敏 雄

「高頭仁兵衛翁の古稀の御齡に際し
越後支部会員は高頭翁の思慕と敬愛の

が中心となり腕をふるつた。
有井館のランブの下に、ぎっしりと
ならべられた古馳走はつぎのとおり、
わらび、みょうがだけ、みねびのす
もの。わらびのおまじ。わさび
つけ。沢わさびのおひたし。こんにゃ
くのさしみ。山いも。アスパラガス(成
沢正通氏寄贈)のマヨネーズ和え。山
うどのぬた。わらび、うど、アスパ
ラ、たらのめ、しいたけのたのふら
馬肉のさしみ。三井前支部長家寄贈に
なる甲府名物の煮魚(あわびの醬油煮)
酒は甲斐駒ヶ岳山麓の「七賢」。
今年の記念品は丹波のぐいのみ。最
後は、有井館づくしの手打ちそば。
あけて十九日。連筆スカイラインの
調査を兼ねて織内副会長からは三井茂
氏の車でみずがき山へ。他は三々、五
々、木賊峠越え、堅山越え、山菜採り
とながれ解散をしていった。
過去十二年間にわたつて行われたこ
のこん親会も、来年からはよそおいも
新らに別の構想で行われる由、今ま
で以上の盛会となることを心から願う
次第である。

参加者(順不同)

織内信彦、山本良三、野口末延、松
本善三、川北仁(名古屋)、岡部みち子
(山形)、大沢伊三郎、岩間升、斎藤俊
哉、石垣政雄、平井和雄、山村正光、
遠藤靖彦、山岸靖彦、望月重昭、田村
英也、内海浩、内海加代子、三井茂子、
窪川五郎、丹沢一男、田中義元

溢れる余り、越後一之宮鎮座の弥彦山に翁が十三歳の時初登山され、海洋と島嶼と平野と山岳の比類のない大麗観に接し、山岳登攀の趣味を解された由縁と、恩師大平最先生の肖像と、三島中洲先生の墳墓を望みたい翁の御希望により山頂の一石を刻んで翁の肖像を昭和二十五年五月二十日翁の御誕生日に建立除幕してから二十五年」

去る七月二十五日、弥彦祭りの雄踏する弥彦山頂公園から十宝山との鞍部太平の地に独り南望して高頭仁兵衛翁の肖像がひっそりとわれわれをまつている。

毎年弥彦神社の灯籠(とうろう)神事の日に、県下の山男達が肖像碑前に参集し、翁の霊を供養し遺徳を慕って高頭祭と銘し、今年も梅雨明けの七月二十五日、はるか眼下に越後浦原平野を望み、日本海に浮ぶ大佐渡、小佐渡の山脈をよそに午後四時、「高頭祭」が開始される。

参列者、会員三十余名、東京からわざわざ駆け付けた山崎安治、板倉勝正、伊倉剛三氏の顔も揃い、高頭祭の前段、越後支部総会、例により何もしない越後支部のことで事業計画も事業報告もなにもない。ただ現在会員数二百二名、会計報告と会費未納者の読みあげと、藤島支部長の報告で終り、いよいよ本番、高頭祭に移る。

会員齋藤平七氏の司会で恒例の第二十五回高頭祭の開幕、神官の修祓、地元弥彦山岳会、日本山岳会、新潟県山岳協会、日本山岳会越後支部の順に玉串の奉典、続いて祝詞、碑前に掲げた越後支部、新潟県山岳協会の旗が日本海から吹き上げる風に鳴っている。

参加者中の紅一点、地元分水山岳会員山宮レイ子女士より、高頭翁への献花、越後支部長藤島玄さんの挨拶で神事はおわる。

寿像銘には「翁性活潑な名利を求めず悠々酒間に自適し……」とあるところから御神酒をレリフに注ぎ、一同乾杯、碑前の芝生に車座となって盃を傾けながら、翁の追憶と歓談に夕暮も間近か。

赤い夕日が西の彼方佐渡の山に沈む頃ようやく暮色濃い碑前に腰をあび、われわれ一同弥彦山頂に向う。

山頂の御神廟前に集合、今日の第二の行事、新潟県登山祭の開幕、これも高頭祭と同じく神官の修祓に引き続き新潟県山岳協会の祈願をこめ玉串奉典、板倉理事の記念講演とそれぞれ型どおりに神事も終り御神酒が回される。

再び御神廟前に車座となって、ここでまた祝杯が回ること、この弥彦山頂の地に齡十三歳の少年高頭仁兵衛に与えた影響の絶大な弥彦山頂の景観、日本海のかたに横たわる佐渡、南嶺には果てしない浦原平野を二分する信濃川、守門岳、栗ヶ岳、五頭連峯と越後の山なみが続く、今から八十五年前高頭翁がその比類のない景観に感激し、山岳趣味を解する第一歩となった弥彦山頂と高頭翁の追憶に一日も暮れる。

日が暮れると今日の第三の行事、県下の山男達が松明をかざして、この弥彦山頂から山を駆けおりる弥彦松明登山祭の時も間近か、何日どこからとも集った県下山男善男善女三百余名、日暮をまつて

とつぎつぎくたつて行く。

手にもつ松明の火が頬を照らし、脚下には弥彦灯籠流しの歓声と弥彦一之宮甚句の太鼓の響き、打ち上る金波銀波の花火に弥彦全町をあげての弥彦灯籠祭りの夏の夜に酔いしれる渦中の様子があたり一面を覆い包んでいる。

午後八時、祭り一色に包まれている弥彦神社山門から拝殿社頭にあかあかと燃える松明を手にかざして全員参列、一同拝礼、新潟県山岳協会の万歳と弥彦神社の万歳三唱とを繰り返し、弥彦駅まで市行進。

その沿道には夏祭り一色に塗られた観光客や若者が、一目灯籠祭りの松明をみようとし鈴なりに押し寄せ拍手で迎えてくれる。

頭上にはどこで打ち上げるのか花火がさかんに打ち上げられ、弥彦灯籠祭りの最高潮。

午後九時、弥彦駅頭の弥彦公園で松明登山の終着、隣り合った新装の体育館でテーブルを並べて懇親会、ビール、栓が抜かれるたびごとに乾杯。

目まぐるしく時のたつた一日ではあったが第二十五回を迎えた高頭祭も、この松明登山で一日の行事を終了し、来る年の高頭祭での再会を約し、懇親は深夜にまでおよんだ。

参加者
山崎安治、板倉勝正、伊倉剛三、藤島玄、山岸栄三郎、齋藤平七、井口正男、高橋庄一、曾山志計雄、鈴木敏雄、荒井辰彦、本望英記、岡村憲、井出秀雄、室賀輝男、奥津五郎、田中栄弘、坂井厚、五十嵐篤雄、望月力、霜島康夫、大岩義雄、久保田全、花井馨、堀川正路、山崎幸和、木村操一、桑原武彦

『山』に原稿をお寄せ下さい。

第五回高所登山委員会

外国登山家へのアンケートの分析

一九七四年三月三十一日

○名古屋、原病院地下図書室

【出席者】金坂一郎、原真、池田常道、浅見正夫、池沼慧、後藤敏宏、湯浅道男、石川博、中村幸正

雑誌「岩と雪」が高山病と高所順応の問題について日本内外の登山家にアンケート調査を行うことを企画したのは、一九七三年秋であった。国内からはただちに回答が寄せられた。それらは、分析のうえ「岩と雪」三四号に掲載されて、この問題に関する日本の登山家の意識に大きなばらつきがあることが明らかになったのであった。

外国からの回答がそろい、翻訳がすんだのは、年が明けてからであった。原、中島氏らがこの企画にかかわったので、第五回の高所登山委員会ではこの外人登山家のアンケートの分析と検討を行うことになった。

委員会の席上では、アンケートを読んだ感想や意見、自己の体験との比較を出席者が各自が述べ、それらがノートとテーブに記録された。それらは、のちほど池田氏らによってまとめられ、「岩と雪」三七号に発表された。

外国の登山家は、日本の登山家に比べて概して遠征経験が豊富で、述べられている意見も、多くの体験に裏づけられた具体的に自信に満ちたものが多かったことが印象に残った。詳しくは「岩と雪」三七号をみていただきたい。(浅見正夫)

第六回高所登山委員会

谷川岳に集う

一九七四年六月二十九日、三十日

○谷川岳、湯浅曾川、虹芝寮

【出席者】金坂一郎、宮下秀樹、原真、中島寛、田中壮信、鹿野勝彦、浅見正夫、池沼慧、渡辺幸、柏瀬祐之、遠藤甲太、高橋寛明、小日向孝夫、梅田浩生、野呂勝正、伊藤行人、三村和男、原田豊、黒田薫、池田常道、大宮求、浜川悠、黒川恵、安藤しづれ、恩田和彦、与田守孝、岩崎元郎、川上隆、村元昭子、小泉共司、高田直樹、中村達、雨宮節、小原和晴、和田豊司他二、三人不詳

二月の御在所の集りは非常に印象がよかったので、やはりつぎの集いも近くに岩場のある山小屋がいいということと谷川岳が選ばれた。ついでのこと、谷川岳をよく登っている人たちが交流できれば一石二鳥と考え、顔の広い池田さん(「岩と雪」編集者)に呼びかけてもらうことにした。結局、山溪が仲介となって、谷川派クライマーと山岳会の高所登山委員会の方々で東海支部の若手などが、谷川山麓の虹芝寮(成蹊大学山小屋)に集まることになった。

こうした分類は本当は無意味なことだが、仮に説明の都合上分類するとすれば、谷川派と日本山岳会派と日本山岳会東海支部派(東海支部は日本山岳会の正統ではないという見解もある)とマナスル西壁派とRCC II エベレスト南壁派と京都派とその他分類できない重要人物が谷川岳にこの可能性があった。頭をひねって各方面に案内状はだしておいしたが、半分集まっても前代未聞の顔合わせになることは

はるかに多くの若いクライマーが集まっていたのは企画者の嬉しい誤算でもあったのだが、ご承知のように、人が多く集まればチーム・ワークは乱れ、会の運営は困難となる。秩序感覚の乏しい会であったのは事実だが、逆にみれば大いに個性の発露を誘う集まりでもあったのだ。あとで多くの人から手紙をもらったが、つぎの集まりに期待する声が強かった。とくに一緒に登った人たちの間で満足感に新鮮なものであったといつてよい。飲んで語り合うだけでなく、一緒に登ることによって交流することの効果が百万言にまさることはずでに御在所の集まりで実証されたのだが、谷川岳ではより大きなスケールでそれが試みられた訳だ。

高所登山委員会としては、実験的いろいろな形式の集まりをもち、その都度「山」に報告してきた。それは数人の純然たる登山学的な議論から、数十人の実践的な集まりにいたるまでいろいろあった。その主旨はあくまでも個人主義的自由でかつできるだけ高度な交流にあった。日本山岳会の場合利用すればそれができるという確信にもとづいてのことだった。海外登山を指すひとびとの人脈も急速に変動しつつある昨今の情勢を考えると、この委員会はたす役割も案外大きいかも知れない。

一度、全会員に呼びかけるような集まりを計画してくれと某理事から注文を受けたことがある。どんな形でやるべきか思案中である。その前にできたら自主的に参加してくれる熱心な人を探している。興味のある方は住所をお知らせ願えば集会の案内状をだします。

今度の集まりは厳密な意味では高所登山委員会ではなく、同会の主催による谷川岳集会であった。こうした会を年に二、三度開こうというのである。

次回は十月に御在所で行われる予定になっている。そのときは集会委員会との協催で、東海支部が設営をするこ

噴火の鳥海山をたずねて

島中 善彌

三月一日全日空機により鳥海山の噴火が確認発表された。当日山は雲に包まれていたが、午後四時前晴れて全貌を現わし山頂付近から黒い噴煙が空を圧する如く大量に立上り東方へ飛んでいるのが無気味に望まれた。山麓住民の多くは恐怖と不安で今にも家や人が溶岩の下敷きになるのではと怯えたものである。

関保町村では直ちに鳥海山噴火対策本部を設けなお危険区域を定めてこれら部族民に対策を指導した。続いて鳥海山全面登山禁止に踏み切ると強い姿勢をとった。今回の噴火は鳥海山噴火の最後となっている文政四年四月から数えて一五三年ぶりである。その後休火山として現在に至ったもので驚愕するもの無理なかつたと思う。噴煙や噴火は風に乗って流れる特殊な気象条件から風は北からと東南からでその中間遊佐町は全く降灰の域から外れている。すなわちほとんど秋田県下に泥流や降灰がおよび中でも泥流は千蛇谷を流下して鳥越川原流におよんだ。鳥越川上流に上水道をもつ象潟町では一時水濁ったとばかり大騒ぎの一幕もあったが幸い泥流は大事に至らずに済んだ。しかし泥流と降灰は相当範囲に亘ったので高山帯の植物の安否は気遣われていた。その実状を探るべく私は四月十八日登ったのであるが強風と笠雲を孕む荒天気配に七合目まで登って下山の止むなきにたつた。当日は曇天ながら山頂丸みえだったが噴煙はみえ

とになった。(一九七四・八・二〇)

(原真、三村和男)

なかった。四月二十八日のことである。早晩起きて山をみたら物凄く噴煙が立っている。ここぞと思い本会々員の佐藤君と大平まで車、そこからスキーで登行に移った。七合目の御浜でアイゼンに代える。御浜からみる荒神岳の黒い噴煙はもくもくと立上り東南風に乗って北方秋田県下に流れそれが十キロ余も視界に入った。御浜神社付近の岩石群には岩水が多様に形成し壮麗美事な観をみせていた。ともかく噴火口近くまで登ることとし外輪山の文珠岳から上方に至った。そこは荒神岳噴火口の正面至近距離である。黒い噴煙は猛烈と吹上げ両岩壁に狂う如くぶつかっては立上るその勢いは凄まじいというより恐ろしさが先立ち自分も吸い込まれそうな錯覚をさへ覚えた。目を転じ千蛇谷をみ下せば新山噴火口から先に流れ泥流と荒神岳からのものと合流し雪上に黒い帯を引いたように長く黒線を印していた。初め噴火は新山東側だった。その後荒神岳南面に移り現在に至っているが噴火口は享和元年の大噴火当時のものと同一であることが判った。五月以後噴煙はほとんど目撃されず現在小泉状態をみせているが火山活動は続いており現場はいつも小噴煙を上げているようである。鳥海山を町域にもつ遊佐町では六月十三日噴火以来初めて現地調査に当たった。私もその一人、新山と荒神岳はまだ危険があるというので千蛇谷からの登山を避け外輪山に登ることとした。七合目御浜を登る道

すがら早咲きのハクサンイチゲとミヤマキンバイが咲いて群落をなし美事だった。外輪山の這松帯やハクサンシヤクナゲは緑豊かに初夏を迎えている。行者岳までは全く降灰らしいものはみられず行者岳から北するにしたがって降灰は量を加え虫穴岩から七高山に至る間は降灰上を歩くといた中で二十センチから三十センチ余の積灰はまるでコンクリート状に固まっている所が多かった。東斜面地域の高山植物群の多くは生コンクリートを吹付けたような固い重しの下敷きになってほとんど枯死状態になっており度々コマバツガザクラ開花期を迎えている中である。ところどころの割れ目から辛うじてみせる小花はみるも痛々しく劣る気持で一杯だった。七高山に立つて西向きの新山に目をやると全山容が灰黒色になっていて日頃の魅力是一片もみられなかった。全く死の山であること肌寒いショックを覚えた。降灰と泥流は新山と荒神岳を襲い鳥海山としての高山植物植生全滅を思わせて悲愴感とあきらめを余儀なくしたが現在に至ってあきらめていた箇所に緑が入ったり遠望ではあるが一つの望みを見出して



山下コレクションについて

山形県立博物館

学芸員 吉野 智雄

昨年九月、日本山岳会員故山下一夫氏の採集による植物標本のコレクション数点が、山形県立博物館に寄贈された。その整理、分類に当たっている者として、コレクションのすばらしさについて紹介しておきたい。

なお、コレクションが、県立博物館に寄贈された経緯は、毎日新聞山形版(昭・48・9・11)9・26日付の二回にわたり「山男の情熱永久に」、「貴重な標本が、いまなお、当時のまま変色もせずに残されている。

もいる。その辺は荒神岳の噴火口近くで珍らしいペンバイウメの産地である。私考すれば噴火前降雪多量に積っている上に降灰をみ一見植物全滅と思わせたが泥流と異なりあたたくない火山灰のこと、五月以来の雨で積灰は流れまた雪も溶けて地や岩が現われてさした被害をみずについたとみていた。しかしまだ噴火は了つていないので今後の火山活動が成否の鍵といつてよからう。最初全山登山禁止になっていたが山麓住民の山菜採りもできないことから強い要望もあり五月になって学者の意見も聞き山形、秋田両県の噴火対策専門家協議会が協議の結果山頂から半径五キロ以内登山禁止となった。しかし夏山期を迎え五キロ以内といえは登山範囲が極めて狭くなったが登山者も目にみえて少なくなつてきたことから三キロに緩和すべしと秋田県側の強硬な態度から協議会は解散にまで発展し秋田県独自に三キロ内決定に踏み切った。これが導火線となり山形県側も態度を緩める姿勢になつていく。三キロ内では一応御浜や矢島口蔵川まで登れるのでどうにか登山者も納得してくれようと思う。

植物研究を専門にしている方々であつても、氏のように、全国各地から、また数多くのすばらしい植物標本を採集することは、容易な業ではない。これを日常茶飯事のごとくやってのけたところに、氏の面目躍如たるものを見出すことができる。

氏の植物採集にも戦後のある期間空白時期があった。あの想像を絶する混乱世相の中で、国民の多くが虚脱状態に落ちいついた時期だ。しかし氏は植物採集との縁を断らなかつて、遠出を控えて、(当時の諸般の事情がそうせざるを得なかつたのである)、一人東京都内や近郊の山野にだけ、栽培植物や野草類、花(園芸種)等を、専ら採集し、気を紛らせていたらしいがこの時に採集した標本が、日本全土に分布する総べての植物を採集できた動機になつてゐるので、結果的には、この標本があるからこそ、山下コレクションが、他に類をみないほど学問的に価値の高いものとなつてゐる。現在では、この分野の植物は、絶対に採集することができないのである。

さらにいえば、この採集が、単に外的な制約から、ほとんど行われなかつたものでなく、氏の内的発動によつて採集が行われたのだと考えると、氏の偉大さ、さらに植物の研究についてその師であつた父親の教育が、いかに厳しく徹底していたかがわかり、本当に頭のさがる思いがする。

氏が、半世紀にわたつて採集した数万点の植物標本(高等植物、菌類、海藻類、地衣類、蘚苔類を含めた植物の全分野)を、山の仲間たちの間でも知っている人は少なかつた。しかし一部の方々の間では、いつか、このすばらしい標本のコレクションを世にだしてあげたいものだとなつてね心してゐたようである。

このぼう大な標本を、学問的に整理、

分類したのは、交通博物館の業務のかわらなされたもので、その作業は、時折、深夜に涉つて行われたという。その整理、分類は正確そのもので、一点の誤りもない。そしてその整理された標本は、永い間交通博物館の書庫(倉庫)物置といつた方が適切である)にしまわれていたのである。

しかし、いつもつきまとつていたのは、そのぼう大な標本の収蔵場所であつた。交通博物館でも、それが貴重な収蔵品であることは判つていても、館の性格上それらを活用する場を見出せず、途方に暮れてゐたという。

山下氏は病床についてからもその移転場所をつねに気にしてゐたといふが、その解決をみないまま過つてしまつた。さぞ心残りであつたことと思つた。氏の死後、この貴重な亡夫の遺産に困り果てたが、未亡人に、救いの手を差しのべたのが、氏の岳父後藤幹次氏だつた。後藤氏は知人の山形県立博物館長結城嘉美氏(植物分類学の権威者)に「ただでもいから、大量の標本をもらつてくれませんか」と、山下コレクションのすばらしさを紹介した。

結城館長は早速上京し、未亡人に会い、交通博物館を訪ねてみせてもらった。すっかりごみを被り、ところどころがネズミに汚されてはいたが、この標本には、採集場所、日付、が明記されておられ、研究資料として充分耐えられるものであるのに驚いた。

氏、半世紀にわたつて採集した数万点の植物標本(高等植物、菌類、海藻類、地衣類、蘚苔類を含めた植物の全分野)を、山の仲間たちの間でも知っている人は少なかつた。しかし一部の方々の間では、いつか、このすばらしい標本のコレクションを世にだしてあげたいものだとなつてね心してゐたようである。

早速、九月十二日に上京し、二トシ積みトラックに標本を満載し、十三日には完全空調装置を誇るわが博物館の

植物収蔵庫に運ばれ、直ちに科・属ごとに整理、分類して格納された。

将来は「山下一夫氏採集植物標本コレクション」として、専用の分類棚を設置することはもちろん、展示室内にも、とくに、山下氏植物標本コレクションのコーナーを設け、一人の山男が半世紀をかけて、全国の山を歩き、採集した植物標本を、一般にみてもらえるように計画を進めてゐる。

その展示からは、氏が仕事と植物研究を通して培つた人間性に触れさせ、人生において偉大な業績をあげ、仕事に専念することの大切さを、広く県民に感銘されるようにしていきたいものだと思つてゐる。

今春来、コレクションの標本作成(台紙に貼布・鑑定・ラベルの作成・貼布)を始めたが、整理、分類が進むにつれて、氏の植物学の深さに驚くばかりである。

それは採集地が全国各地にわたつており、現在では、到底採集することのできない貴重なものばかりで、地方にいて全国の植物の分布、分類を研究できるほどの内容をもつてゐる。

未だ、キク科の整理が終わつたばかりで、植物標本コレクションの内容を詳細にお知らせできないのが残念だが、二、三年後には、すっかり整理、分類し、広く公開して山下氏の偉大な業績を顕彰できるようにしていきたいと思つてゐる。

〔付記〕

昨年四月十四日亡くなった会員山下一夫君の植物標本のぼう大なコレクションが本会山形支部長後藤幹次君のお骨折によつて山形県立博物館に引取つて頂いてから間もなく一年になる。コレクションが学術的にみても立派なことや、山下君と植物とのからかいあひなどについて、吉野智雄氏から以上のような興味深い原稿を頂いたのだが、会

報の性格や紙幅の狭いことから相当部分を省略せざるを得なかつた。ご好意に感謝すると共にご諒承を得たい。また今後山形方面におでかけの方で余暇があつたら山形博物館を訪ね山下コレクションをみて頂きたい。

(渡辺公平)

月山の薄雪草



坂倉登喜子

東北の山に咲くヒナウスユキソウを訪ねる旅は、飯盛山以来大休歩いたが、なぜか月山には行く機会がないまま、ようやく今年の夏、全国的に花の写真撮影計画をたて、月山もその目的の山のひとつとして、花を訪ねる山旅となつた。

鶴岡駅から夜行に接続する一番バス六時二十分に乘つて、かねて羽黒山へ登つた人から聞いていた逆コースをとつて、まず羽黒山頂まで登つて、人けのない神社前の涼しい境内で朝食をとり、立派な杉木立の参道を下山して、登りの時間を有効に利用し、再びバスで月山八合目まで立ち通しのまま登つた。

夏はこの八合目のお花畑までバスに乘れるので、山頂までは約二時間の花の散歩道で、歩き始めると尾瀬そっくりの湿原に木道ができていて、草地に入れないようロープが張つてあつた。

このあたりからキスゲが点々と色彩を添え、珍らしいトキソウなどをみつけながら、いつしか九合目の小屋につ

き金目四也のお茶を飲んで休んだ。そのあたりから月山山頂から裾をひく緑のスロープが、いかに優雅にのびている斜面が美しく眺められ、ふりかえると鏡のように池塘が光つて夏雲を写してゐた。

登るほどに雪溪が尾根近くまで残るあたり一面のお花畑で、北アルプスと東北特有の花がミックスして咲いてゐた。この道で前方から小柄で肥つた女性が歩いてきて、ふと立止つてびびりしたような顔をしていた。

「あらっ」と先方で私とわかつたらしくにこにこしておられたので近ずいて見ると、昔JAC婦人部で国体予選などで一緒に働いた坂倉黎子(現在小林)さんで、久しぶりのめぐりあひを喜んだ。話によると湯殿から月山頂上を経て羽黒への逆コースで下山の途中とこから、私たちはそこから直ぐ上の月山山頂小屋へ早い目に着き、西側斜面一帯のヒナウスユキソウの群落をみつけて、花の好きな女性たち二十人ばかりはしばらく、その大群落の原を散歩した。

月山山頂一帯のヒナウスユキソウは、飯豊、朝日連峰に咲く花と同じ種類で、梅雨明けのタイミング良く晴れた輝かしい太陽に一言に咲き揃つた姿はまことに美事な群落で、夕照を浴びて、風に揺れる情景は私たちを大歓迎してくれるかようであつた。

月山小屋は信仰登山者も混えて超満員、寝具がなく夜明け方寒い思いをした人もあつたが、管理人は感じよく混雑して申訳ないといふ挨拶してゐた。

翌日は早朝霧に濡れたウスユキソウをみに付近を歩き、二百円の参拝料を払つて神社をひとめぐりして山頂を出発した。急な下りを少し歩いたところにもうひとつ小屋があつたが、山頂小屋の方が利用者が多く申込みのない人は、下的小屋へ案内されてゐたらしい。

岩のころろした径の下はまた思いがけぬお花畑で、キスゲの群落とウスユキソウがオレンジと白い星の花園をくりひろげ、月山をバックに素晴らしい。そんな花々に囲まれた女性たちはあちこちと花の写真を写すのに夢中であつた。

大きな残雪をみる斜面では夏スキーを愉しむ姿がみえた。志津分岐から右へ鉄梯子で急坂をくだると装束場の谷流れ近くでは、ミズバシヨウが咲き残つていた。湯殿山奥社を経て湯ノ沢にでて一日二本という不便な午後バスで山形につくと雨だつたが、駅前の宿で汗を流し疲れを癒して夜行に乗つた。(49・7・27、28)

わたしの ウェストン祭

川 北 仁

ウェストン祭への参加も今度で五回目数える。上高地のターミナルに降り立つとさすがに肌寒い。朝が早いせいもあるが山岳地帯では当たり前である。お天気も上々である。焼岳がはつきり望見される、そして残雪が美しい穂高の吊尾根、いつきても何度眺めてもあきることのない山岳美である。バス待合所の屋上から望遠レンズで朝の穂高を二、三枚キャッチ、握飯で朝食をすませると早速バス通りを帝国ホテルまで歩く。バスの窓からみたホテルと周囲の緑があまりに美しかったからである。ここでカラー写真を三枚ほど撮る。ホテルはひっそりとしていて閉ざされたままだである。河童橋はバスであるいは車で着いた人がだんだんふえてくる、今日の好天

候に合せたひとびとはみんなその幸運に感謝せねばなるまい。

十時前ウェストン像の前になるともう人垣でいっぱいである。しまった、これではカメラを構える位置がない、川端をみると榎先生が信濃支部の会員と談笑しておられる。あとで聞いたことだが先生は記念山行で徳本峠を越えられたとかあの年で徳本越えとは素晴らしい健脚であり気力でもある。祭の行事は型通りで坂倉さんグループによるコーラスから始められた。つづいて、織内副会長、日高大先輩、渡辺公平氏、地元村長さんらのスピーチがあり、今年には二月に物故された山の詩人、尾崎喜八先生の未亡人が参列されて人目をひいた。

尾崎先生は特長のある鋭い眼光で山の詩を朗読されたものであるが、それも今では過去の思い出となつてしまつた。祭が終わつてから織内さんと岳行きの話がまとまつた。振向くとニコニコとした藤島越後支部長が立つておられた。屋敷は梓川畔のベンチに席をとつた。梓川の水は真青で激しい流れである雪とけ水である。河童橋の雑踏を縫つて山岳研究所に行く。新装なつた山研は六月十日がオープンだといふ。白樺林の中にじんまりとしたたずまい、玄關の大きなシンボルマーク、木の香の匂う室内、整った調度品何もかも新しいくめ、写真真から完成まで長い道のりと思うとき関係者のご努力には卒直に脱帽せねばならない。管理人の津村さんから熱いお茶をよばれ吉阪さん、山崎さんと雑談、時間を見計らつてビジターセンターにでかける。尾崎喜八先生の追悼会に臨むためである。受付では尾崎詩人特集のアルブ誌が売られていた。追悼会には正面にベレー帽姿の尾崎先生の遺影を花とともに掲げ、横名管会員ほか故人ゆかりの方々思い出話やテープ

にとつた生前の声などが披露されたが最後に未亡人が涙ながらに謝辞をのべられ一同の心を打った。再び山研に戻ると少憩の後三時頃岳沢に向つた。岳沢の登りははじめにうっそうとした原生林を抜けねばならない。登り道には薄汚れた雪があらちに残つてい

「ここを抜けたら暑いなあ」と織内さんの言葉。木立の間から雪溪がみえる頃とある場所を腰を下ろし夏ミカンを食べていると右下方の林から人影が現れた「山菜を採りながら登つてきたがさっぱりみつかからない」と岳沢ヒュッテの上條岳人さんである。日焼けした顔に白い歯、がっちりした体軀、山小屋の主らしいタイプである。展望のきく登りはたのしい、カメラの方も忙しくなる。上條さんがこれは山ざくらだと教えてくれる、満開である。振返るとどつしりとした濃沢岳の右遠方は乗鞍岳の全容が望見されてくる。天狗のホルの雪溪が折からの陽光に照り輝いて目に痛い位である。一昨年の十月岳沢にきたときは猛吹雪で視界も定かでないかつたことを思うと今日の快晴は何といふ幸運であらう。ヒュッテに着いて靴を脱いでいると冷たいカルピスが運ばれてきた。汗ばんだ体にこの飲料は旨かつた。食堂でストーブを囲んで上條さんの小屋建設の苦心、遭難救助の模様など興味深い話が長々とつづいて。ビールを抜いて下さつたがこれはコップ一杯で十分だった。夕食は山菜料理である。料理の説明を受けるにあつて山日記にメモをとつた。タラの芽の天ぷらはとくにおいしかった。同宿者は他に四人ほど若い女性が小屋の上あたりでスキーをやるといふところの雪質では相当の達人だらうと思う。

翌日、五時に起床、外にでるとかなりの寒気である。空には雲一つない、今日も上天気だ。乗鞍岳が美しい。七時半ガイドとともに天狗のホルへ向う織内さんを見送つて上高地へ下つた。

海外からのたより

モスクワにて

田村俊介

前略 お元気でご活躍のことと存じます。

今回の新潟大、大阪外大合同パミール登山隊の出発に際し、いろいろとご配慮頂き心から感謝いたしております。お陰様で八月八日、六名がピーク・レーニン(七、一三四m)に登頂成功し、八月十四日下山し帰幕しました。今年のパミール国際キャンプには資本主義国より十カ国が参加(一七〇名)一〇〇人が登頂しました。参加者の中にはエベレスト南壁国際隊のオーストリアのウォルフガング・アクト(二度登頂)やアメリカのジョン・エバンズもいました。兩人とも大変な親日家とみうけられました。

われわれの隊は最初クライレンコ峠よりピークをねらいましたがC2でテントおよび大半のアタック用装備、食料を雪崩で流され、その後、リブキン岩直上ルートとラズジェーリナヤ・ルートの二隊に分かれ、頂上をねらいました。その結果ラズジェーリナヤ・ルートからの隊は悪天候のため六、九〇〇mで退却しましたが、(同日退却中スイス女性一人死亡)リブキン岩直上ルートからの隊は稜線直下六、六〇〇mで二日悪天候をたえ、八月八日無事六名登頂致しました。この悪天候でピーク・レーニン直下の六、九〇〇mにいたロシア女性選抜隊八名がテントをやぶられ、全員遭難という悲劇にまで発展してしまいました。なおリブキン岩直上ルートから登頂

したのは日本隊だけで、大部分の登頂者はラズジェーリナヤ峰を経るノーマル・ルートからの登頂でした。詳細については後刻報告いたしますがとりあえずお礼方々一筆したためました。なお小生今年十月には帰国する予定です。

八月二十日

(丹部節雄宛)

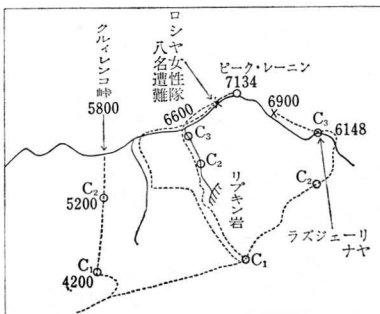
図 書 紹 介



わらぢ (第四号) 覆刻版

松本高校山岳部著

旧制松本高等学校山岳部の部報「わらぢ」第四号(第六号が覆刻されることになり、このほど第四号が発行された。いまだ説明するまでもなく、旧



松高山岳部の穂高山群における活躍は穂高山における登山史上というより、日本の近代登山史上からみて、きわめて傑出したものであり、高く評価されている。

しかし、その行動を正確に伝える部報「わらち」は、現在ではほとんど入手不可能な状態で、これを何とか読みたいと思っている人は、相当いるのではないかと思われる。そういう折から旧松高山岳部関係者により、今回その覆刻事業が始められたことはまことに有意義なことと考える。

内容について、あらためて紹介したい。山崎次夫、牧野康夫、恩地裕三氏による「奥又白谷について」と、村山雅美、朝日奈菊雄、石原重徳三氏による「積雪期における露営」の二つの論文からなっているが、とくに前者は奥又白谷の概念がきわめて要領よくまとめられてあり、奥又白谷に関する基本文献として価値が高いものである。記録は、昭和十一年四月から昭和十三年九月まで収められている。

なお付録として「わらち」覆刻版に寄せる（井上増次郎、追憶（沼野洋一）、「わらち」に書かれていない部分（恩地裕三）、あの頃（牧野康夫）の四編を載せたパンフレットが付されており、これまた面白い。

覆刻版昭和四十八年十月、茗溪堂発行、定価二、二〇〇円

山の文学

福田 宏 年著

著者にとって久しぶりの山の本である。著者は「あとがき」で「私は山のファンであるが、登山家でもなければ山の専門家でもない。私と山との繋りは、十年間にわたる立教大学の山岳部長時代の体験につきる。したがって、ここに書いたことも、ほとんどは山岳部生活とそれにまつわるものという結論

果となつてしまった」と謙遜されているが、とんでもない話で、著者はレックとした日本山岳会員であり、しかも図書委員会や書評委員会のアクティブなメンバーとして現に活躍されているのである。そして伝統ある立教大学の山岳部長を十年間もつとめられたということは、そのキャリアに十二分のハクが付いているはずである。

だからこの随筆集は、そのキャリアに裏付けされた著者独特の風格ある味わいが、いたるところに表れていて、まことに楽しい。

「山に想つ」「山と文学」「山頂への道」「山頂の憩い」の四章からなり、三十一編の随筆が収められているが、「山と文学」の章における「山を描いた文学の魅力」、「峠の明暗」、「山の湖のロマンティズム」ほか七つの文章は著者の文芸評論家としての立場からのもので、とくに「深山久弥氏の思い出」は深田氏と著者の付き合いがしみじみと述べられていて興味深い。

第一章の「山に想つ」の中に収められている「山岳部長の思い出」、「伝説」、「唯一の教え子部員」の三編は文字通り、立大山岳部長を通じて見た大学山岳部員の実体が温い眼で記されている。直接山岳部の中に育った人では、ちょっと気の付かないような点まで、あるいは驚き、あるいは感じながら書かれていて、まことにユニークな文章である。

最近、読むに足るような山の随筆集がないのを心淋しく思っていた折から久しぶりで「大人」の読む山の本が出現した——というのがいつわりのない読後感である。

昭和四十九年三月日本交通公社出版事業局発行、二四五ページ、定価一、二〇〇円

（以上 山崎安治）

55 WAYS TO THE WILDERNESS

In Southcentral Alaska
by Helen Niehueser, Nancy Sinnerman and Hans Vander Laan

ヒマラヤのトレッキングがさかんであるが、氷雪に輝く高峰を望みながら山麓や丘陵を逍遙したり、峠を越えて行ったりするワンダリングに適したところは、アラスカにもたくさんある。本書はアラスカ山岳会（Mountaineering Club of Alaska）の一人の男性（故人）と二人の女性によって作られたアンカレジ周辺の自然への案内書である。

アラスカはアメリカに残された最後の自然だといわれる。人工の加わらない自然を Wilderness とし、それは大都会アンカレジのすぐ近くにも惜しげもなく括がっている。ただその Wilderness は夏には、悪名高い蚊の巣窟となっている湿地帯やブッシュ、熊などをはじめとする野生動物、濁流逆巻く川などにさまたげられて、われわれが自らの足によって踏み込めるところは限られている。

地域はチュガチ山地、タルキートナ山地、キーナイ半島の三つの地域。その中で、短いのは一二時間の子供連れの軽い歩行で終るもの、長いのはテント持参で何日かを要するもの、また夏の尾根歩きから冬のスノーシューやスキーのツアー、さてはゴムボートによる川下りに至るまで、多彩の五十五コースが集められている。

各コースの解説には地図と写真がついているが、地図は Geological Survey（日本の国土地理院にあたる）の等高線入りのもの（「インチョー」マイルが基本）である。G.S.の地形図には、実際にはない道が書いてあったり、ある

のに書いてなかったりしているのは、日本の地形図と同様らしい。ほとんどのコースは出発点にもどってくるようになっていてのは、アプローチに車を使わなければならないアラスカでは当然のことである。

総じて初心者のためのハイキング案内といえるが「アラスカの未来」と題するはしがきは、貴重な Wilderness をまもろうとする意欲にあふれて、読みごたえがある。

しかしこういった案内書がでること自体、アラスカの自然が失われて行くことを意味するものであろう。

なおアラスカ南東部（バンハンドルといわれている地方）の案内も近く刊行されるらしい。

22センチ×18センチ 一〇六ページ
初版一九七二年 The Mountaineering Club of Alaska, Box 122, Seattle, Washington 98111 発行（松崎中正）

深田久彌

山の文学全集—全十二巻

朝日新聞社刊

深田久弥氏が茅ヶ岳で急逝してから三年になる。氏は少年時代から深く山を愛し、国内の山々にはもちろん、ヒマラヤまで足をのぼし、山に関する著作も多数残しており、その数は三十余冊におよんでいる。その著作も単なる紀行文や随想の域を脱し、独自の山岳文学をつくりだしているとともに、研究の面ですぐれた業績である。

今回、朝日新聞社が小林秀雄、井上靖、三田幸夫、今西錦司氏の監修により、この全集を企画し、未収録作品を含めた氏の山に関する全著作を全十二巻にまとめて刊行されることになり、今では手に入りにくい著作も含めて深田久弥氏の「山の文学」を再び味わ

ることになった。

全十二巻は、対象とされた山の地域によつて、日本の山（第一巻—第五巻）ヒマラヤ（第六巻—第九巻）中央アジア（第十巻—第十一巻）その他著者の身辺随想・年譜・書誌等（第十二巻）とまとめている。

この全集の特色としては、氏の未公開作品が収録されていること、全巻につけられている解説「深田久弥・人と作品」で近代登山史のなかでの深田久弥氏というものが浮き彫りにされていることである。解説の執筆者は、小島島水（近代登山の先駆者）の熱心な研究者である近藤信行氏である。

第一巻 わが山々

深田氏が作家として文壇に登場した初期の頃に発表した山岳紀行・随想集である「わが山々」（昭和九年刊）「山岳展望」（昭和十二年刊）「山の幸」（昭和十五年刊）の三冊が収録されている。

第二巻 山頂山麓

この巻には「山頂山麓」（昭和十七年刊）「わが山々」（昭和二十七年刊）と、これまで著者の作品集に収録されていなかった戦前の未収録作品二十二篇の山岳紀行・随想集が収められている。

第三巻 わが愛する山々

この巻には「山ささぎ」（昭和三十四年刊）「わが愛する山々」（昭和三十六年刊）「山があるから」（昭和三十八年刊）の三冊が収録されている。わが愛する山々」は二十一篇の紀行から成っているが、これらの作品を発表した時は、日本百名山の完成を目指していた時期で、著者は毎月のように山に登り、わずかの期間の紀行を集中して発表したものである。

四六版、各巻平均四一五〇〇ページ
写真一ページ、第一巻昭和四十九年四月、第二巻昭和四十九年五月、第三巻昭和四十九年三月、朝日新聞社

発行、定価各巻一、八〇〇円

(高遠 宏)

図書室便り (昭和49・8)

新刊図書受入報告

実業之日本社寄贈

(1) 佐伯文蔵著『剣岳の大将文蔵―立山と剣に生きて六十年』 昭和49

朝日新聞社寄贈

(1) 深田久彌山の文学全集 10 シルクロードの旅』 昭和49

定期刊行物受入報告

【部報・会報】

(1) Bush 山の会『Bush』No. 46, 47 (74-7, 8)

(2) 兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 87 (49-8)

(3) 『さくら山岳会月報』No. 156 (49-8)

(4) 日本地図資料協会『古地図研究』No. 53, 54 (49-7, 8)

(5) 国立公園協会『国立公園』No. 296 (49-7)

(6) 京都山岳会『京都山岳』No. 592 (74-8)

(7) 奥多摩山岳会『奥多摩』No. 39 (49-4)

(8) 奥多摩山岳会『O.M.C.レポート』No. 292~297 (49-3~8)

(9) 長野県山岳協会『山岳協会ニュース』No. 36 (49-7)

(10) 東京野歩路会『山嶺』No. 532 (49-8)

(11) 明治学院大学山岳部『Sei』No. 11 (49)

(12) 低く山を歩く会『低山』No. 110 (49-8)

(13) 日本山岳協会『登山月報』No. 61, 62 (49-4, 5)

(14) 『山の自然を考える会誌』No. 6 (49-8)

(15) 大町山岳博物館 Vol. 19, No. 8

(74-8)

(16) 日本登山協会『山と雪』No. 195 (49-8)

【雑誌】

(1) 『アルプ』No. 198 (74-8)

(2) 『岳人』No. 327 (74-9)

(3) 『山と溪谷』No. 432 (74-9)

【その他】

(1) 『浦郡山の会ヒマラヤ登山隊仮報告書―アナンプルナ南峰74―』

(2) 『北海道道北自然生態調査報告書―48年度―』

(3) 山根達治著『春』

【海外雑誌】

1. 『Die Alpen』50. Jahrg. Quartal 2.

2. 『Die Alpen』N. 6. Juni 74.

3. 『Alpenvereins-Jahrbuch』Vol. 98. 1973.

4. 『Alpinismus』74-7.

5. 『Appalachia bulletin』Vol. 39. No. 10. Oct. 73.

6. 『Appalachia』Vol. 39. No. 3. June 73.

7. 『Club Andino Peruano. Boletín』No. 3. 3/4 74.

8. 『Groupe de Haute Montagne. Annales』1973.

9. 『Montain』No. 36. 74-6

10. 『Österreichische Alpenzeitung』92. Jahrg. Folge 1395. 5/6 74.

11. 『Pendular』No. 395. 10/11 72.

第6回日本ヒンズー・

クシユ会議開催

昭和49年11月9日~10日午前10時

場所 石川県金沢市東御影二八八

「金沢ヘルセンター」

会費 会員 五、五〇〇円

会員外 六、〇〇〇円

申込先 〒621 金沢市野町一

二一三三 津田文夫

この一本展のお願い

恒例の年次晩餐会にあわせて行なっている「この一本展」も、今年で十三回になります。よろしく協力くださいますようお願い申し上げます。

一、山に関する蔵書の中から、珍本、秘本、稀本、署名本など何でもこの一本と思われものを一冊もち寄る。

二、「この一本」は年次晩餐会当日会場に持参し、展示の上、会後も持ち帰る。

三、持参する「この一本」に関する随筆一篇(四百字詰原稿用紙二枚以内)を添える。

四、原稿には「この一本」の書名、著者名、発行所、発行年月日とともに、随筆の題名と筆者名を記す。

五、原稿は十一月十五日までに日本山岳会図書委員会「この一本展」係まで送付のこと。

六、晩餐会の当日、出品目録と四項の原稿をとりまとめて印刷し、参加者全員に配布の予定。

今年も晩餐会を有意義にするため、協力たまりたいと存じます。

あとかき 伊倉理事のなみなみならぬ努力と編集委員の協力により懸案だった『山』の第三種郵便物認可がおりました。各位の一層の原稿締切り期日の厳守をお願いします。なお、今月号使用のカットも小野幸氏の提供のものです。(小倉)

昭和四十九年十月二十日発行

113 東京都文京区湯島一六一

利根川商事(株)さくらビル

発行所 法人 日本山岳会

発行者 今 西 錦 司

編集代表 山 崎 安 治

(813)二二八六(代表)

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技 報 堂

山を愛し、山に生き、そして山で死んだ作家

深田久彌

茅ヶ岳で急逝して以来三年、いよいよ声価の高い「山の文学」を未刊作品をも含めてここに集大成!

深田久彌

山の文学全集

全12巻

監修●小林秀雄・井上靖・三田幸夫・今西錦司

★毎月十五日一巻ずつ刊行

1 わが山山※

2 山頂山麓※

3 わが愛する山々※

4 瀟洒なる自然※

5 日本百名山※

6 雲の上の道※

7 ヒマラヤの高峰

8 ヒマラヤの高峰

9 ヒマラヤの高峰

10 シルクロードの旅※

11 中央アジア探検史※

12 九山山房夜話

※印既刊定価一、八〇〇円

朝日新聞社



茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

かんあおい

山下一夫著 <A 5判>定価2,600円

遙かなる未踏の尾根

マカルー1970年

日本山岳会東海支部

<B 5判430頁・カラー64頁>定価4,800円

シブトンの自叙伝

未踏の山河

大賀二郎・倉知 敬訳

<A 5判440頁>定価1,900円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著 <菊判584頁>定価2,500円

森林・草原・氷河

加藤泰安著 <A 5判482頁>定価1,500円

山の古典と共に

大島堅造著<四六判280頁>定価1,500円

雪山・藪山

川崎精雄著

<A 5変型判340頁>定価1,200円

我がスキーシュプール

麻生武治著<B 6判388頁>定価3,400円

山 岳

日本山岳会編

<A 5判>

67年	2,500円
66年	2,300円
65年	2,000円
64年	2,000円
63年	2,000円
62年	2,000円
総索引	1,000円

山で唄う歌1集・2集

戸野 昭・朝倉 宏編

<A 6判126頁>1集240円・2集280円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編 <B 6判202頁>定価480円

日高山脈

北大山の会編

<菊判362頁>定価2,200円

原野から見た山

坂本直行画文集

<B 5箱入布特製本>定価4,200円

雪原の足あと

坂本直行著<B 5判206頁>定価2,800円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

<A変型208頁>定価3,600円

いろいろばた

南会津山の会

<B24どり判320頁>定価1,900円

すこし昔の話

初見一雄著<四六判400頁>定価1,200円

ブータン感傷旅行

小方全弘著 <菊判280頁>定価980円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編 <A 5判350頁>定価900円

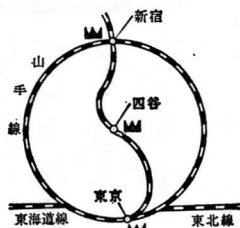
登山・スキー用具専門店

●買いやすい
山の店

山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101

TEL. 06(362)5736

●北へ来たら
山の店●フレッシュな
山の店

四谷店 東京都新宿区三栄町三番地

TEL (351) 7432-1912

八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五

TEL (271) 1560-8575

新宿店 新宿ステーションビル四階

サービスショップ

TEL (352) 65664

日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

なるべくなんにも
持たない方がいい
けれど、どうも
要するものがある。
なにしろ人間ですから
しるべき山ですから

どうしても必要なものを
ここにまとめます
主責任はもっています

かたるびシンティ
でんや 281-8456
中央区・八重洲4の1

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1

PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031
 東京店・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店
 大阪店・北区堂島崎上一丁目47 (364) 0933 (代)
 福岡店・須崎町1-4 (28) 34440

